

[特集] 広く浅く知る
白血病

令和になってこう変わった

- [Chapter 1] 白血病の診断
- [Chapter 2] 白血病の治療法
- [Chapter 3] ここまで来た！白血病の治療
- [Chapter 4] 白血病治療の合併症
- [Chapter 5] もうすぐこうなる！白血病治療

本誌においては毎年1回の頻度で血液領域の特集が企画される。昨年2023年10月号は「血栓・止血の異常を理解する～広くて深い基礎知識～」をテーマとし、Chapter 1で広く浅く知識を習得していただいた後に、Chapter 2以降でより深く掘り下げていただく内容とした。一方、本号のテーマは「広く浅く知る白血病～令和になってこう変わった～」である。血栓・止血関連疾患はさまざまな内科領域で関わることが多いのに対して、白血病については、診断がついてからの診療は血液専門医にほぼ限定される。そこで、本誌の読者層に鑑みて、高度に専門的な内容になることは避けて、白血病診療の全体像、とくに令和の時代になってどのようなところが変わってきたのかを把握していただくことを目的とした。

やはり、最も多くの内科医に知っていただきたいのは診断である。発熱、貧血症状、出血症状などを主訴に、最初は一般内科に受診することも多い。診断のためにどのようなステップをたどるべきか、血液領域の特殊検査が診断においてどのような意義をもっているのか、そして変遷する診断分類についてChapter 1にまとめた。Chapter 2は古典的な抗がん薬から、この20年前後の間に開発された治療薬、免疫細胞療法としてのキメラ抗原受容体遺伝子改変T細胞(chimeric antigen receptor engineered T-cell: CAR-T)療法および造血幹細胞移植について紹介している。Chapter 3はサブタイトルの「令和になってこう変わった」を最も実感していただける部分ではないかと予測するが、各種白血病の最新の治療について執筆をお願いした。Chapter 4は白血病治療における合併症対策であり、とくに薬物相互作用については経口チロシンキナーゼ阻害薬による外来通院治療を受けている患者において、その血中濃度にさまざまな薬剤が影響を与える可能性があるため、血液専門医以外の皆様にも共有していただきたい内容である。Chapter 5は近未来に実現される可能性が高いが、新規治療薬によって軽い副作用でさまざまな白血病が治療できるという今後の治療を示している。

「広く浅く」のコンセプトどおり、非専門医にも通読しやすいような特集としたつもりではあるが、より狭く、ということであればChapter 1を読んでいただいたうえで、残りは目次を一瞥して興味をもった項目だけを拾い読みしていただくということでもよいのかもしれない。もちろん、血液専門医の皆様には全項目にしっかりと目を通していただきたい。本特集がさまざまな分野で活躍されている先生方に役立つことを期待している。

神田善伸

(自治医科大学附属病院/附属さいたま医療センター 血液科)